

課題1：どじょうと金魚（著者：小川未明）

ある日、子供がガラスのびんを手を持って、金魚をほしいといて、泣いていました。すると、通りかかったどじょう売りのおじいさんが、そのびんの中へ、どじょうを二匹いれてくれました。

子供は、喜んで、びんに顔を押しつけるようにして、ながめると、ひげをはやして、こっけいな顔に見えるどじょうは、

「坊ちゃん、あのきれいなばかりで、能のない金魚よりは、私のほうがよっぽどいいですよ。ひとつ踊ってみせましょうか？」といて、一匹のどじょうは、びんの底から水の上まで、もんどり打って、こっけいな顔を表面へだし、またびんの底に沈みました。

子供は、いままで、どじょうをばかにしていたのは、まったく自分の考えがたりなかったのだと知りました。

「金魚よりか、あいきょうがあるし、踊りもするし、ずっとおもしろいや。」と、子供は、びんを持ち歩いて、友だちに吹聴したのです。

金魚を持っている子供は笑って、

「そんな、どじょうなんかなんだい、この金魚は高いのだぜ。」といて、相手にしませんでした。

「坊ちゃん、悲しむことはありません。まあ見えてごらんなさい。」と、どじょうはいいました。

じめじめした、いやな天気がつづきました。生活力の乏しい金魚は、みんな弱って死んでしまったけれど、どじょうは元気でした。そして、いつでもあいきょうのある顔をして、かわるがわるびんの中で踊っていました。

課題2：お金とピストル（著者：夢野久作）

どろぼう 泥棒がケチンボの ^{いえ はい}家へ入ってピストルを見せ、^{かね だ い}お金を出せと言いました。ケチンボは、

「ただ ^{かね だ}お金を出すのはいやだ。その ^{ピストル う}短銃を売ってくれるなら ^{せんえん か}千円で買おう。お前は ^{まえ}わたし ^{かね もら}私からお金さえ貰えばそんな ^いピストルは要らないだろう」

どろぼう ^{かんが}泥棒は考えておりましたが、とうとうその ^{せんえん}ピストルを千円でケチンボに ^う売りました。ケチンボは ^{どろぼう}泥棒から ^{う と}ピストルを受け取ると、すぐにも ^{どろぼう う}泥棒を撃ちそうにしながら、
「さあ、その ^{かね}お金ばかりでない、ほかで ^{ぬす}盗んだ ^{かね}お金もみんな ^だ出せ。 ^だ出さないと ^{ころ}殺してしまふぞ」

^{どな}と怒鳴りました。

どろぼう ^{はら かか わら}泥棒は腹を抱えて笑いました。

「アハハ。その ^うピストルはオモチャの ^{たま}ピストルで、撃つても ^で弾丸が出ないのだよ」

^いと言ううちに ^{おもて に だ}表へ逃げ出しました。ケチンボは ^{な だ}ピストルを投げ出して ^{どろぼう お}泥棒を追つかけて、^{おうらい とり く あ はじ}往來で取っ組み合いを ^{とお}始めましたが、やがて ^{ふたり}通りかかったおまわりさんが二人 ^おを押えて ^{けいさつ つ い}警察へ連れて行きました。

^{けいさつ}警察でいろいろ ^{しら}調べてみますと、^{どろぼう もら}泥棒が ^{せんえん}貰った ^{かね}千円のお金はみんな ^{がんぶつ}贓物のお ^{かね}金で、^{ほんもの}ピストルはやっぱり本物の ^{ピストル}ピストルでした。

^{ふたりともろうや い}二人共牢屋へ入れられました。